砂漠の頂きに立つ

河はほとんど終点に近い所まできて、漸く砂丘の中をうねうねと流れるようになる。

そんな砂丘の中で、ある日１頭の馬に跨がって砂丘を上へ上へと登ってみた。自分の意志で馬を自在に操れていたなら、私は恐らくそんなに高い所まで登らずに、早々と仲間のもとへひきあげていたに違いなかった。しかし、私は馬に乗ったのはその時が最初であったし、馬がひとりあるきはじめてしまっても、それを制することもできなければ、諦めて馬から降りようという気にもなれなかった。馬は、自分に任せておけばきっとすばらしい風景を見せてやると言わんばかりに、ゆっくりと着実に砂丘の頂きをめざす。私は時折試すように馬を反転させてみるのだが、それからまた馬は自分の意志で砂丘の頂きへと、時折思い出したようないななきを寂しく放っては足を運ぶ。眼前にアクリルをこぼしたような青い空が広がっていったとき、既に私と馬との間には無言の契約が交わされていたようだ。

やがてアクリルの薄くなった所に突如として地平線が現れ、ダイナミックな私のバード・アイズには、目のくらむような横の広がりを持った無傷の大地と、巨大な光る大蛇の姿があきらかとなった。

この時確かに、私の体のどこかで、それまでさびついていたのかもしれない堅いスイッチがカチリとなった。

（三浦　　智）

陽気な中国人たち

みんなを乗せたジープが大西海子ダムに到着。僕は真っ先にダムの階段をかけ上がった。ダムというよりは大きな水門という感じだ。水は思ったより少なく、湖底は所々で水面から顔をのぞかせていた。湖は、はるか彼方まで広がり水面は日の光を浴びてキラキラと輝いていた。これで合宿が終わったんだという実感がこみ上げてきた。全員でここまで来れて本当によかったと思うと同時に、何となくホッとして、とてもいい気分だった。

遠くの方を見つめていると、航行中の楽しかったことや辛かったことが次々と頭の中に浮かんできた。徐々に溜ってくる疲れでイライラすることもあれば、日本のことを思い出し、早く家に帰りたいと思う時もあった。でもそれ以上にいいことがたくさんあった。中国人はいつも陽気で人を楽しませてくれる。偶然に出会う人たちに話しかけてもほとんど聞きとれないのに、言葉を交わすことが純粋に楽しい。ウイグル人の家に招かれ、夕食を

御馳走してもらったこともあった。その日は近所の人たちまで集まり、琵琶のようなものを夜遅くまで弾いてくれた。どの人もいい人ばかりだった。

しかし何といっても一番すばらしかったのは広大な自然だ。砂丘のふもとで泊まった時どこまでも連なる砂丘に心をときめかせ、大きな大地に感動した。夜になれば、星が空一面を覆い、時には流れ星が流れた。満月はまぶしいほどに輝いていた。

今このダムの上では、太陽がギラギラと照りつけている。ダムの下から流れ出たわずかな水が小さな池を作っていた。その先には、どこまでも草原が広がっていた・・・・。

（土山　貴弘）

月こそ私の宿

眠りにつく前が一番幸せな時間だったのは、これが初めてであった。

泥のように眠りたい・・・・。

遠征中の正念場であるワジと６００キロ航行のどちらにも補給部隊に回り、砂漠から離れたウルムチ市で日記帳に書いたのはこの九文字のみ。朝が来れば夜を待ち、夜が来れば朝を待つだけの数週間。

残りの１００キロ地点で再びパドルを手にした時、河の流れは既に無く、大の字に寝転んだ背中からその日の疲れが地面に沈んでいくのを感じながら私は幸せだった。この疲労感。

うっすら目を開けると太陽の生まれかわりが居た。ああ、どれだけ夢見続けてきただろう。できたてのガラス細工のように透明で、可憐なこの満月。どれだけ。ランボーが大熊星を宿とするなら、月こそ私の宿である。沈黙の木霊。銀色の丘。目を閉じても感じる凄い力で迫ってくるものは、河中の瀬で見た波の連続を一瞬にして凍結させたような砂のうねり達からの無言のメッセージなのか。あるいはリラックスしてフワリ浮かぶ月からのものなのか。

受身のまま薄明るい闇に包まれ夜の一部になるとアイデンティティが崩壊する。補給部隊なのか航行部隊なのか、学生か社会人か、日本人か中国人か、男か女か、人間か否か。だけどこれは幸福感なのだとそれだけ頭の隅でぼんやりと思い目を閉じる。

あと数日でゴール。いつも感じるはずの合宿終了後の解放感に浸る自分を想像し、ゾクゾクする程の楽しい時間はなかった。しかしこの日の月は虚脱感を埋め、子守歌を歌ってくれていた。静かに。静かに。